昭和日常の博物館の試み

紙上展覧会へようこそ

昭和を探る展覧会の視点

紙上展覧会へようこそ

私たちの生活・暮らしは昭和60余年の時の流れのなかで、身のまわりのすべてが大きな変貌を遂げてきた。特に、昭和30年代は、テレビ・冷蔵庫・洗濯機など電化製品の普及、薄暗い裸電球から部屋中を照らし出す蛍光灯への変化など、無かったものが現われ、見えなくて済んだものが白昼のもとに照らされたという、日常生活のレベルで20世紀、最も激しい変化が起こった時代といえる。
これは、本町のみならず日本全国に当てはまる歴史的な激動といえるが、こうした昭和の激動の変化をモノで後世に伝える活動は、博物館・資料館ではあまり行われていないのが現状である。

そこで、本館では、昭和時代をテーマとした展示会を展開し、資料の収集・保存にあたっている。また、昭和時代をテーマとすることで、資料の寄贈・情報の提供などの点でより多くの方々に博物館との関わりを持っていただけるようになってきている。
本書は、こうした昭和をテーマとした20の展覧会を紙の上で再び見学していただけるよう編集した。
20の展覧会は、昭和時代を探る20の視点・鍵ともいえる。
20の視点に立ち、昭和の暮らしを懐かしく思っていただくとともに、今こそ、昭和の暮らし・日常を博物館において収集・記録し、保存していくことが急務であることが伝われば幸いである。
まずは、懷かしさを体感して下さい。それが、昭和日常博物館への入口となります。

紙上展覧会へようこそ

昭和を探る展覧会の視点20

3つの博物館

1 展示室（p6〜9）
昭和日常博物館

2 展示室（p10〜11）
ノスタルジー博物館

3 展示室（p12〜14）
20世紀博物館

4 展示室（p16〜17）
駄菓子／おもちゃ

昭和の日常を探って

8 展示室（p24〜25）
ごみ

7 展示室（p22〜23）
のりもの

6 展示室（p20〜21）
住まい

5 展示室（p18〜19）
家事／子育て

昭和の タイムカプセル

9 展示室（p26）
値段

10 展示室（p28）
忘れられた
タイムカプセル

11 展示室（p29〜30）
暮らしの中の
タイムカプセル

12 展示室（p32〜33）
お土産品から
架空の旅

昭和の日常を楽しむ／活用する

16 展示室（p41）
暮らしの
標本箱を作る。

15 展示室（p40）
博物館を
わが家に作る。

14 展示室（p36〜38）
懐かしさの効用

13 展示室（p34〜35）
古い地図から
架空の旅

博物館の新しいカタチ

17 展示室（p42〜43）
街角博物館を作る。

18 展示室（p44〜45）
楽しい
パレードを作る。

19 展示室（p46〜47）
暮らしの
実物図鑑を作る。

20 展示室（p48〜50）
自分の歴史を
モノで綴る。

1 展示室（p6〜9）

昭和日常博物館

2 展示室（p10〜11）

ノスタルジー博物館

3 展示室（p12〜14）

20世紀博物館

3つの博物館

3つの視点

昭和日常博物館の試みを支える３つの博物館。
まずは、この３つの博物館をご覧いただき、それぞれの視点で、昭和の暮らしを記録する必要性について、考えてみよう。
キーワードは、日常・ノスタルジー・モノ。

1 展示室

「日常が博物館入りする時」

昭和日常博物館

私たちの
暮らし・日常を博物館で
扱う、保存する。
その必要性について見ていこう。
昭和日常博物館誕生。

博物館・美術館には、貴重な文化遺産・歴史資料・芸術品などが収集・展示されている。したがってある意味、私たちの日常生活とは切り離された非日常的なイメージをそこに抱く。
ここでは、そのような非日常的な資料ではなく、私たちが生活のなかでごく当り前のように使ってきた様々なモノを集め、展示し、残していくことの必要性、意味について考えていこう。
また、博物館で扱う資料としては新しい、昭和時代。なかでも、著しく変化した戦後から高度経済成長期にかけての、人々の日常生活、暮らしを中心に扱っていく。
すると、ほんの少し前の時代であるのにもかかわらず、その頃のモノが、意外に残っていないことに気付くのである。
そこで、『昭和日常博物館』という昭和の私たちの暮らしを保存、展示する施設を仮想して、その器のなかで様々な視点から、昭和時代をモノで残していく試みを行っていく。
まずは、その必要性にせまってみよう。

これも博物館のなか。昭和30年代の情景を再現する。

過去の時代の生活空間を再現するには、様々なモノが必要となる。

その時代に存在したあらゆるモノを集めて展示していく。

暮らしはモノの集合体でもある。

ついさっきまで、人がいたような気配がする。それを目指して集め、配置する。

モノを集め、情景を再現する過程を経て、昭和の暮らしの記録が成立していく。

2 展示室

ノスタルジー博物館

昭和の暮らしを
考えるのに、懐かしい
ノスタルジー
という
言葉は欠かせない。

「路地・裏・大博物館」

昭和時代という近くて懐かしく、しかし、消えつつある時代を探っていくには、欠かせないキーワードがある。それが「懐かしい」であり、また「ノスタルジー」だ。
人は何かにノスタルジーを感じる時がある。ノスタルジー・懐かしさ・郷愁と呼ばれる感覚は何に基づいているのだろうか。また、何を見、何を聞いたときに感じるのだろうか。それは、その人の経験・生活環境・歴史に負うところが大きく一人ひとり異なっている。
ここでは、こうしたノスタルジーについて取り上げ、何に、どうして、どのようにノスタルジーを感じるのかを探ってみる。
それが、昭和の暮らしを考えるのには欠かせない。多くの人が感じるノスタルジー、同時に多くの人が語ることのできる昭和の暮らし。そのノスタルジーや語られた言葉が昭和時代という歴史の一幕を飾っていくことになる。
まずは、ノスタルジーを味わってみよう。
そして、本書をめくっていくことで、それが何かを探っていこう。感じていこう。

ノスタルジーを感じるモノ。度合い。それは一人ひとりに異なる。

たとえば理髪店

路地裏

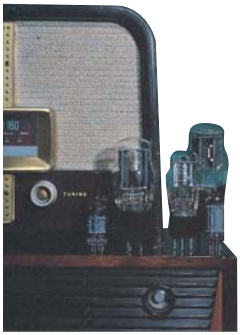
3 展示室

「世紀の博物館」

20世紀博物館

日常を記録するためには
モノが必要である。
モノ自身が語るモノ語りこそが
生活の記録となる。
実物としてのモノの
存在意義は大きい。

20世紀は明治・大正・昭和・平成と移り変わり、また、戦時下の暮らしをも経験し、この100年の間で人々の生活は大きく変化してきた。昭和の暮らしを記録していくには、その前後の時代、場合によっては、20世紀の暮らしを考えてみる必要がある。
そうしたとき、明治・大正時代の建物や道具が残されていても、日常の暮らしを伝えるモノが意外に欠けていることにも気付く。
また、言葉や文字の解説よりも、時代の産物である実物・モノのほうが、私たちによりわかりやすく歴史やその時代の生活を伝えてくれることがある。
実物のもつそのような言葉以上の力をモノ語りと表現してみた。
ここに紹介する多くは特殊なモノではなく、誰もが日常生活のなかで使ったり、見たことのある身近なモノだ。
その実物こそが大切なのである。
写真や言葉とは異なる実物の存在意義を確認しよう。そして残していこう。



暮らしのなかのモノ（シャンプー・セルロイドのせっけん箱）

暮らしのなかのモノ（水・粉・練りハミガキ）

暮らしのなかのモノ（食品・インスタントカレー）

昭和の日常・暮らしをモノで記録する。それが昭和日常博物館。

1

2

3

4 展示室（p16〜17）

駄菓子／おもちゃ

8 展示室（p24〜25）

ごみ

7 展示室（p22〜23）

のりもの

6 展示室（p20〜21）

住まい

5 展示室（p18〜19）

家事／子育て

昭和の日常を探って

9 展示室（p26）

値段

6つの視点

懐かしさ・ノスタルジーを感じながら、昭和の暮らしを具体的に見ていこう。
そして身のまわりに何が残っていて、何が消えてしまったかを確認しよう。

12

16

15

14

13

17

18

19

20

4 展示室

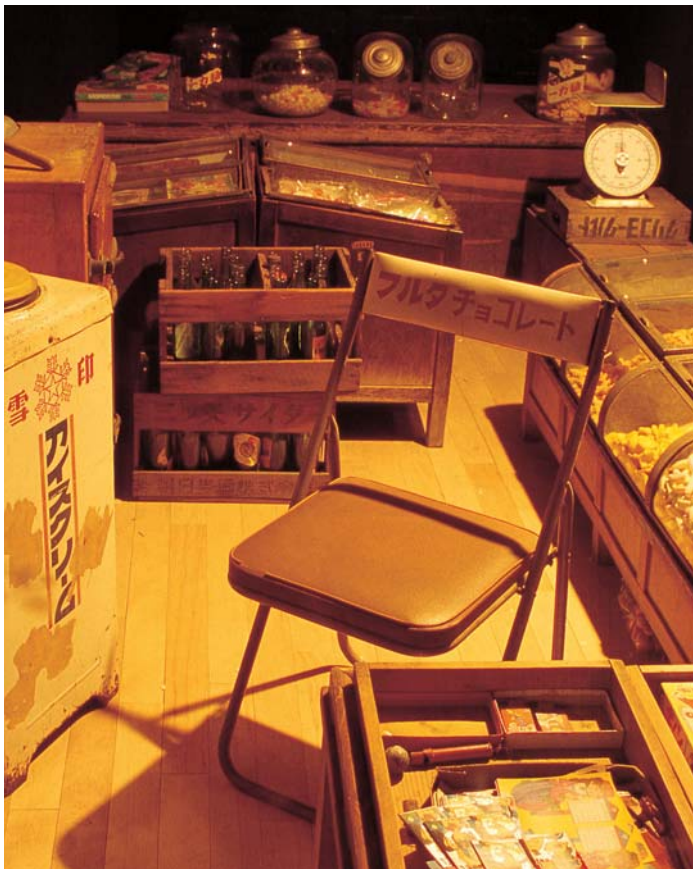
駄菓子／おもちゃ

まずは、懐かしさの代表格である駄菓子屋さん。昭和の子どもの暮らしを集約している。

「こんな駄菓子屋さんに行ってみたい」

「駄菓子屋さん」は、多くの子どもたちを魅了した場所である。
子どもの頃の思い出をたずねると、駄菓子屋さんと学校がよくあがってくる。子どもたちにとって駄菓子屋さんは友だちが集まる場所であり、物を買う場所であり、社交場であった。
そこで、おこづかいで手に入れることができるお菓子やおもちゃ、あるいは、当て物と呼ばれるクジに興じたキオクが多くの人に残っている。
したがって、まず、駄菓子屋さんという場所を取り上げるのは、昭和の子どもの暮らしを考える上で、欠かせない視点といえる。
記憶のなかの懐かしい駄菓子屋さんを再現することで、そこでの出来事や、残しておくべきモノに何があるのかを探ってみる。
失ってしまった思い出やモノがリアルに見えてくる。

懐かしい場所はどこかと、たずねると
駄菓子屋さん、という答えがよく返ってくる。



再現された駄菓子屋さん

5 展示室

家事／子育て

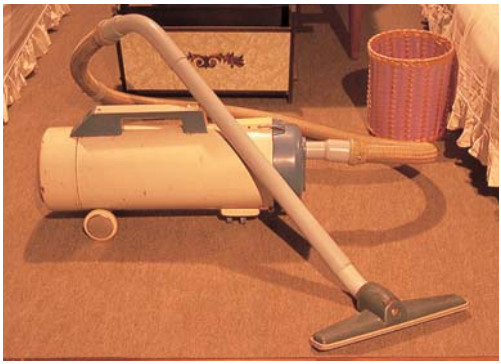
生活の場である家。そこでは、炊事、洗濯、掃除、子育てが日々行われる。

「昭和家事・子育て奮戦記」

昭和時代が終わり、平成に移行し10年以上。10年ひと昔、というが、それ以上に昭和は遠くなったと感じる。
ここでは、昭和時代を通じて人々が家庭のなかで、どのような道具やモノを使って暮らしてきたかを見ていく。
特に昭和30年頃を境に一般家庭に普及していった電気冷蔵庫・洗濯機・掃除機などの電化製品は、「家事・子育て」の中心的存在として形や性能を変えながら今日まで活躍し、いわば、昭和の家庭を見てきた証人ともいうことができる。
昭和の暮らしを探っていくには、そのなかで使われてきた道具を取り上げていく必要がある。
掃除・洗濯・炊事・子育てといった、ごく当り前の家庭での日常生活に使われた様々なモノに視点をあてる。
当り前の生活は、産業技術の進歩とともに当り前のように便利になり、便利になるとなかなか後戻りできなくなる。気付かない間に、暮らしは根底から変わっていった。ほんの40年ほどの間に。

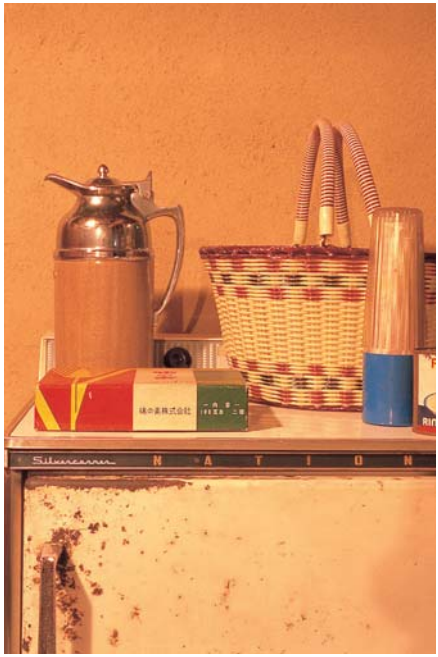
スイッチ１つでごはんを炊く／卵をゆでる

洗濯する／ローラーでしぼる



掃除機できれいに

子どもを育てる



便利な電気冷蔵庫

6 展示室

住まい

生活の場である家。
家そのものが、形を
変えていく。
たとえば
応接間の登場。

「応接間がやってきた。」

戦後、特に昭和30年代から40年代。応接間という洋間が家の一部として、さかんに設けられるようになった。新築の家はもちろんのこと、農家のような古い建物にも、土壁を化粧ベニヤ板で覆い、畳を板敷にかえ、応接家具・応接セットを置くことで、客人を椅子で接待する場所がつくられた。
同時期に、キッチンにもステンレスの流し台やテーブルと椅子が用いられるようになり、洋食器もひんぱんに使われるようになった。茶碗や湯のみ、箸中心の生活のなかに、スプーンやフォークを使う食生活が取り入れられ、家中が洋風化していった時代ともいえる。
昭和の暮らしのなかで、その主たる場である家も大きく移り変わってきた。日本的な建築から洋風な建物へ、畳の上での暮らしから、椅子、ベッドなど身体を床から離しての暮らしへと変化してきた。
暮らしの場としての家・部屋の変化は見逃せない。

応接間がやってきた。

和の中に洋食器が

7 展示室

のりもの

人の暮らしのなかで使われたのりもの。自転車にはじまりオートバイ、そしてマイカー。

「はじめての自転車に乗れたあの日」

昭和の暮らしのなかで、はやくから使われたのりものといえば、自転車である。自転車といっても、当時は高価なのりもので、大切に扱われていた。自転車を購入する際には、鑑札という、いわゆるナンバープレートを取り付ける義務が課せられていた。
自転車につづいて、オートバイやスクーターも普及し、特に、自転車にエンジンを付けた原動機付き自転車が懐かしい。
昭和30年代から40年代に入ってくると、自動車もかなり普及しはじめ、「マイカー」という言葉が、車に対する憧れを象徴している。
生活のなかで使われるのりものは、より便利なものへと、移り変わってきた。その変化は、暮らしの向上とも密接に関わっている。
また、自家用ばかりでなく、蒸気機関車から電車への移行や、地下鉄、新幹線の開通など、公共交通機関も著しく変ってきた。

自転車屋さんで修理

スクーター(ブリキ玩具)

スクーター(ラビット)

マイカー時代の到来
(ブリキ玩具)

8 展示室

「過去からの郵便小包」

ごみ

生活の中で捨てられて
しまいそうな消耗品の数々。
ごみ。
それを残すことで
本当の暮らしぶりが記録できる。

私たちは暮らしのなかで、様々なモノを手に入れるだけでなく捨てている。特に意識することのないゴミに近いモノも暮らしの一面を知るには、欠かせない資料といえる。
たとえば、郵便小包や贈り物。中身は大切に保管されるが、梱包用の包装紙や、箱やひもは本来破られ、捨てられてしまうモノである。しかし、郵便小包をどうやって出していたかなどをよりリアルに知るには、そのものを残しておくことが、最良の手段といえる。
通常捨てられてしまうモノや消耗品を収集・保存することで生活の生々しい変化を記録することができる。
暮らしを記録していくには、不必要なモノは存在しないのかもしれない。要と不要、ひなたと陰、それらがそろって暮らしを構成しているのである。
本来捨てられるモノ。残らないモノ。そこに暮らしが見えてくる。

小包の包装紙なども

パンの袋も

プレゼントの包装紙も

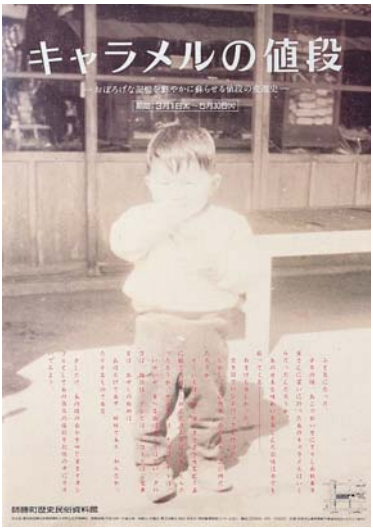
そして「ごみ？」を展示

そして「ごみ？」も集める

9 展示室

値段

モノの値段。
モノの値段は
暮らしと密着している。



「キャラメルの値段」

昭和の日常的な暮らしは、モノを購入して、消費することにあるといっても過言ではない。暮らしのなかで必要な、食べ物、道具、のりもの、娯楽など、様々なモノや体験をお金で買って暮らしている。商品を買ったり使ったりした記憶は鮮明に残っていても、その値段となるとおぼろげになってしまうことが多い。
たとえば、甘くておいしいキャラメル1箱が幼い頃10円だったか、20円だったか。夏の暑い日に飲んだあのラムネは、鉛筆は、漫画の本は、初めての給料は、車は…。
値段をたどることによって、そうしたおぼろげな記憶やぼやけていた話に鮮明なピントを合わせ、昭和の暮らしの変化や、自分自身のキオクをさかのぼることができる。
モノの値段も昭和の暮らしを探るのに有効な手段だ。

1 2 3 4

8 7 6 5

2つの視点

10 展示室（p28）

忘れられた
タイムカプセル

昭和の

11 展示室（p29〜30）

暮らしの中の
タイムカプセル

タイムカプセル

今の暮らしのなかに過去の暮らしが残っている。そんなタイムカプセルを探し出し、残す。

16 15 14 13

17 18 19 20

10 展示室

「屋根裏の蜜柑箱は宝箱」

忘れられたタイムカプセル

屋根裏に
置かれたみかん箱。
押入れのダンボール箱。
忘れられたモノたちが
眠っている。

屋根裏に置かれたみかん箱やダンボール箱には、昭和の暮らしのなかで使われてきたものが、しまい込まれていることがよくある。古い家であればあるほど、より古いものが残されている。
そんな忘れ去られた箱をあけると、まるでタイムカプセルのように当時の暮らしが思い起こされる。
学校の教科書、普段あまり使わない食器、聴かなくなったレコード盤、旅先で購入した絵葉書など様々なモノが残されている。
屋根裏や物置に置かれたみかん箱やダンボール箱は、まさに、過去の暮らしを現代に伝えるタイムカプセルであり、昭和の暮らしを知るモノが詰まっている宝の箱といえる。
みかん箱が宝箱。
そうした意識を持つことにより、ともすれば捨てられてしまうであろう過去の暮らしを伝えるモノたちを残していくことができるようになる。

11 展示室

暮らしの中のタイムカプセル

小さなタイムカプセル。
そこには小さなノスタルジーが
あふれている。
探し出してみよう。

「引き出しの中のノスタルジー」

身の回りの小物がまず収納される場所。それは、おそらく、机やたんすなどの引き出しだろう。ここでは、身近で日常的な生活用品の移り変わりを知るため、そうした物が収納される「引き出し」にスポットを当ててみよう。
引き出しは私たちの日常生活からは切り離すことのできない空間で、その中には日常の歴史が凝縮されている。日常生活の歴史を物語るタイムカプセルということもできるだろう。
実際、古い民家を訪ねると、おじいさんが使っていた机が２階にそのまま残されていたり、おばあさんの桐だんすが当時の着物が入ったまま残っていることがよくある。身近な暮らしが残されている場所である。
普段の私たちの生活・暮らしのなかにも意外に多くこうした暮らしのタイムカプセルは存在している。
家のなかに潜むタイムカプセルを探し出し、その封を開けてみよう。懐かしさを味わうことができる。

暮らしの中の

タイムカプセル

探してみよう

あけてみよう

1 2 3 4

8 7 6 5

9

3つの視点

昭和の暮らしを今探ることは、モノを博物館で残していくということ以外に、もうひとつの効果がある。
それは、懐かしさが与えてくれる効用であり、楽しさである。

12 展示室（p32〜33）

お土産品から
架空の旅

16 15

14 展示室（p36〜38）

懷かしさの効用

13 展示室（p34〜35）

古い地図から
架空の旅

昭和の日常を楽しむ／活用する

17 18 19 20

12 展示室

「楽しかった旅のキオク」

お土産品から架空の旅

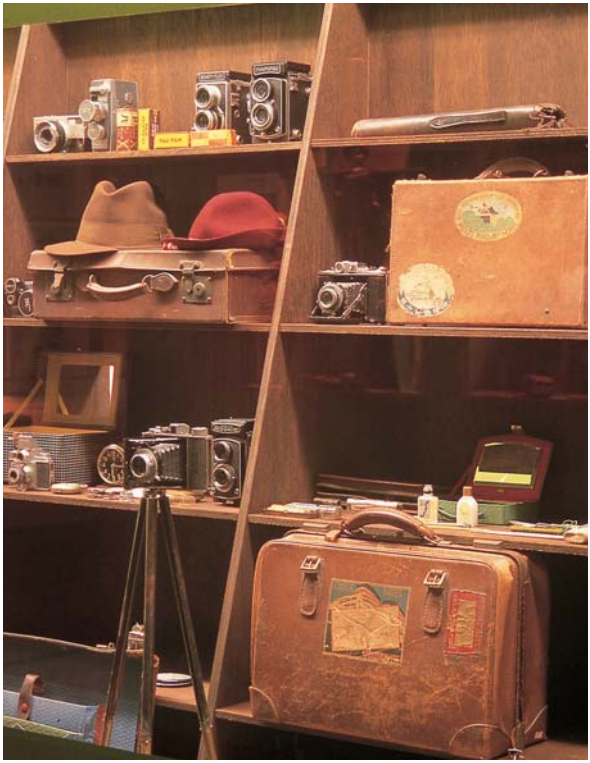
お土産品を通して
自らの旅のキオクを探る。
ひとときの時間旅行。
気持ちがやすらぐ
効果があるかも。

旅行先などで買い求められたお土産品。絵葉書をはじめこけし、土人形などの郷土玩具、小さなガラスケースに名所を詰め込んだようなもの、キーホルダーなど、多種に及ぶ。
お土産品は旅先の思い出として購入される。景色が気に入れば絵葉書を、思い出となる名所があれば、その名が記されたこけしやペナントを買ったりする。
したがって、そこには自らの旅のキオクが詰まっていることになる。
そこで、モノとして残されたお土産品を手にとることで昭和の時間旅行に旅立ってみよう。
そのお土産品を買った場所、いつ頃だったか、誰と行ったかなどを思い出しながら懐かしい架空の旅に出かけてみる。
モノは資料として博物館で保存するだけではなく、モノを通して様々な展開が可能となる。博物館の資料としてだけでなく、様々な可能性を考えてみるのも重要な視点だ。
そのひとつが架空の旅。

夏の海辺のおみやげ

ペナント

名古屋テレビ塔／東京タワー



懐かしい旅の道具

代表格 こけし

ガラスのなかの名所

13 展示室

「机上のワンダーランド」

古い地図から架空の旅

時間旅行。
古い地図を見ながら
旅に出よう。
時間旅行に旅立つ
きっかけとして
古い地図を眺める。

旅に出ようとする時、目的地の地図を広げて予定を立てる。そんなひとときが旅の楽しみのひとつでもあり、時には旅そのものよりも楽しい時間になることもある。地図を見るということは、地図を通して頭の中に旅を想像することである。
「机上の空論」という言葉があるように、多くの場合、現実・実際に優があるとみなされがちだ。しかし、旅の場合には、この「机上の空論」が大きな楽しみのひとつになっている。
まだ行ったことのない場所の地図を広げて、あれこれと計画をたててみよう。もし、それが古い地図であれば、もしかしたら、過去への時間旅行を楽しむことができるのかもしれない。
古い地図をきっかけとして、過去への架空の旅を楽しんでみよう。
想像力の翼を持って、机上の旅に出発しよう。

机の上で架空の旅

デフォルメされた絵地図

立体メガネ

バス旅行

イメージを膨らませる

14 展示室

懐かしさの効用

ナツカシサの効用を探る。こころをいやすヒーリング効果としての懐かしさ。昭和。

「ナツカシイってどんな気持ち」

昭和の暮らしのなかで実際に使ってきたモノを見るとき、多くの方が、「懐かしい」という言葉を口にする。それは、ごく自然なことである。そして、懐かしいモノを見て、会話の弾むひとときを過ごすと、とても満足した表情になる。
懐かしいという言葉を発する時、人の心はどう動いているのだろうか。心理療法のなかでも、懐かしい品物を使う「回想法」という手法が用いられている。専門家が行う「回想法」でなくても、懐かしいという感情は多くの人にあり、懐かしさのシャワーを浴びることで、心の疲れをいやすことができるという。
昭和日常博物館だからこそできる、そんなヒーリングの可能性を探り、森林浴ならぬ「懐古浴」「懐かしさのシャワーを浴びる」ことの効用を味わってみよう。
懐かしいモノが与えてくれる効用を少し意識する。
知らない間に、実はその効用を受けているのかもしれない。

セルロイドのペンケース

懐かしい教室

ランドセル

幼い頃のキオクを探る

ナツカシサが何かを与えてくれる

1

2

3

4

8

7

6

5

9

6つの視点

感じとった懐かしさ・ノスタルジーを何かの形にしてみる。
博物館を自分自身で作ってみる、考えてみる。
昭和をテーマとすることで、博物館が身近なモノになった。

12

16 展示室（p41）

暮らしの
標本箱を作る。

15 展示室（p40）

博物館を
わが家に作る。

14

13

17 展示室（p42〜43）

街角博物館を作る。

18 展示室（p44〜45）

楽しい
パレードを作る。

19 展示室（p46〜47）

暮らしの
実物図鑑を作る。

20 展示室（p48〜50）

自分の歴史を
モノで綴る。

博物館の新しいカタチ

15 展示室

「もしも私が博物館を作るなら…」

博物館をわが家に作る。

昭和の暮らしを
伝えるモノ。
それを今度は
何か形にしてみよう。
まずは、家のなかに
ミニ博物館を作ってみよう。

博物館・美術館というと、大きな建物のなかにガラスケースを配し、貴重な歴史資料や芸術品などを並べる場所といえる。しかし、昭和のモノが博物館の資料・展示品になるとすれば、わが家にもたくさんの資料があることになる。

そこで、学術的な博物館というよりは、家庭内で食器棚・本箱などを活用して作ることのできるミニ博物館。自分のコレクションや思い出の品などを展示することを考えてみよう。そこでディスプレイする楽しみを味わい、自分らしさを主張する空間を作ってみよう。

生活のなかで、博物館・美術館のような空間を意識してモノを並べてみると、部屋のなかに新しい空気が流れ込んでくる。自分のこだわりをもって、そんな「家庭内博物館的空間」と呼べる小スペースを作ってみよう。

昭和の暮らしを伝えるモノが博物館の資料となるのなら、博物館は実に身近な場所であり、わが家が博物館そのものになる。そこでは、一人ひとりが学芸員になれるのである。

たとえば、ガラスの器

16 展示室

「私なりの標本箱」

暮らしの標本箱を作る。

スペースがなければ、
昔、昆虫採集や標本作りを
したことを思い出し
箱のなかに
昭和の暮らしを
詰め込んでみよう。

標本とは、広辞苑によれば「生物学・医学・鉱物学などで研究用または教育用とするため、個体またはその一部に適当な処理をほどこして保存したもの。」であり、標本箱とは、その標本を整理し、保管する箱のことをいう。
ここでは、この標本・標本箱を研究用・教育用というより、家庭的・趣味的な用途に使ってみよう。標本にする資料も、自分なりに考え、集めてみる。
テーマに基づき集められた標本、それを収めた標本箱は、ある意味で、小さな博物館の展示会・展示会場ともいえる。「私ならこのテーマで、こういったものを標本として集め、標本箱に収めてみたい。ディスプレイしてみたい。」という意識を持ち、博物館の展示会を自分なりの視点・好みで企画する気分を楽しんでみよう。
暮らしのなかにあるモノを詰め込んでみてもいい。
博物館ではモノを資料として整理したり展示したりする。その作業は実は個々人で行っても楽しいことである。

めんこの標本箱

17 展示室

街角博物館を作る。

今度は、規模を拡大し
家のなかではなく
街を意識して
博物館を作ってみよう。

「小さな博物館を作る」

地域に根ざしたミニ博物館が各地で設立され話題を呼んでいる。東京都墨田区の「小さな博物館」運動は産業と文化の調和をめざしてスタートし、住民の暮らしのなかで息づいている。また、岐阜県岩村町でスタートした「まちかどギャラリー」は城下町の活性化に効果をあげたと聞く。これらは、町おこしの一環として設立されたものが多く、使われなくなった商店のショーウィンドーやケースなどがミニ博物館として蘇っている。
そこで、家庭のなかに博物館的な空間を作ったり、標本箱を作ったりしたものを、家の外に向けて発信してみよう。
まずは、お客さんの目に入る玄関先でもかまわない。自信がついてきたら、思いきって道行く人の目に触れるところに飾ってみよう。
いや「飾る」ではなく、博物館を意識し「展示」してみよう。
実際に展示できなくても、そうした意識を持つことで、博物館はより身近なものとなってくる。

たとえば、こんな博物館

たとえば、まねき猫・福助

たとえば、子どものモノ

たとえば、古い絵葉書

たとえば、クレヨンなど

たとえば、三輪車など

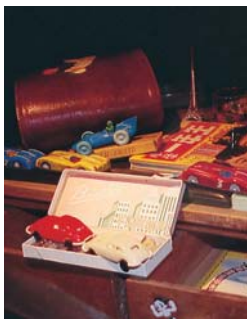
18 展示室

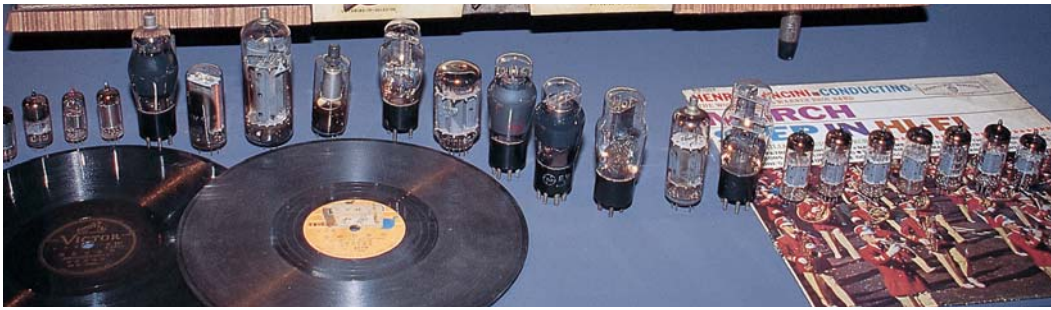
「机の上の架空のパレード」

楽しいパレードを作る。

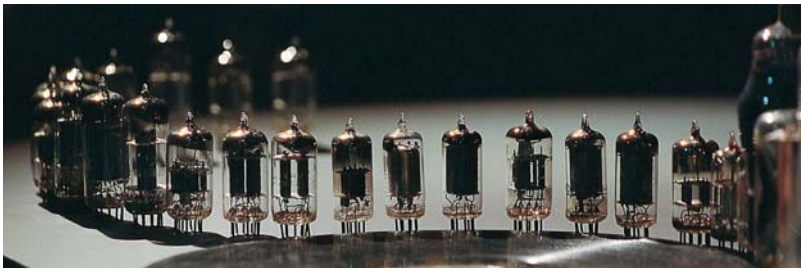
集まったモノたちで
オリジナルのパレードを作ろう。
子どもたちも
おもちゃを並べてみよう。
そして、そのパレードに
解説をつけてみる。

コレクション。それも、小さな。
子どもの頃、机の上に消しゴムや怪獣のおもちゃなどを思い思いに並べて楽しんだ経験を持つ人は多いだろう。ミニカーのコレクションを順番に並べて遊んでいる子どもたちを見かけることがある。パトカーや救急車、スポーツカーにブルドーザー。その並べ方は適当なように見えるが、どうやら子どもたちは、そのパレードにちゃんとした意味を与えているようだ。
博物館や美術館のコレクションは、大きなケースや展示室に並べられ、その内容も広く一般に認められるものである。しかし、規模・コレクションの評価は違えど、子どもたちもモノを集めて並べ、意味を持たせるという「架空のパレード」を作っていることに変わりはない。
そこで、自分で楽しみながら自分だけの美術館・博物館的展示、ディスプレイを机の上に繰り広げるという意味で、様々な小さなパレードを作ってみよう。


机の上の架空のパレード



いろいろなパレードを
考えてみよう。
たとえば、こんな。



レコードに合わせて真空管パレード？

招福パレード？

おもちゃのパレード？

19 展示室

「昭和モノ図鑑を作る」

暮らしの実物図鑑を作る。

調べる楽しみ。
昭和のモノの
正体を探る。
昭和のモノを調べるのは
自分の歴史を
探ること。

昭和の日常生活のなかで使われてきた様々な物・商品・道具などは、身近な存在だったはずであるが、現在では、意外に正体不明の物が多い。「えーっとたしか」で終わってしまうことがある。
また、ある世代にはわかっても別の世代にはわからない物、見たことはあるが使ったことのない物、忘れてしまった物、そうしたモノを調べて、解説を加えてみよう。
単に解説を加えるのではなく、「モノ図鑑」もしくは「箱図鑑」という形をとってみる。モノの実物とともに解説を1つの箱の中にかっこよく組み込んで、図鑑や百科事典の1ページを広げたように作ってみる。
この方法で様々な昭和の暮らしを伝えるモノに解説を加え、同時に「箱図鑑」作りの楽しさを体験しよう。
思い出の一品を組み込んでみても楽しい。
箱の選び方や、解説の書き方によって、自分らしさも表現しよう。

箱に入れて図鑑を作る。

化粧品図鑑

食品パッケージ図鑑

作る

作る

のみもの図鑑

おかず図鑑

作る

ドロップ図鑑

20 展示室

「超・自分史ガイド実践編」

自分の歴史をモノで綴る。

自分の歴史を
モノで綴る。
昭和のモノたちを
理解すれば
自分の歴史を知ることに。

人にはそれぞれの歴史があり、それを綴ったものが、いわゆる自分史と呼ばれるものだ。
自分の歴史は自分が一番よく知っているはずでも、いざそれを振り返りまとめようとすると、なかなか難しい。そこで、暮らしのなかで使ってきた様々なモノを使って自分の歴史を探るためのモノさしを作ってみよう。
たとえば「昭和25年に生まれた男性」という架空の人物。この人は、この粉ミルクをこのほ乳瓶で飲み、小学校へは、このランドセルを背負って出かけた。当時、流行っていた遊びや、学校での出来事、結婚した頃の給料や家具、電化製品などは、どんなものだったのか。具体的なモノを探るのである。
昭和の暮らしの移り変わりをモノで残しておくことで、現代に生きる人の個々の歴史をも表わすことができる。
自分自身の歴史をモノを通して探ってみよう。

モノを並べて自分史を綴る

生まれた頃

モノで綴った
自分の歴史

幼い頃

幼い頃

少年期

小学生の頃

はじめてのテレビ

はじめてのビール、ウィスキー

ボーリングブーム

カラオケブーム